

鹿児島湾から得られた標本に基づく九州沿岸初記録となる トカゲハダカ（ワニトカゲギス科）

松村優花¹・大富 潤²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院農林水産学研究科（鹿児島市）
k0672813@kadai.jp

² 鹿児島大学水産学部（鹿児島市）
ohtomi@fish.kagoshima-u.ac.jp

³ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 07 January 2026
Revised 10 January 2026
Accepted 11 January 2026
Published 12 January 2026
DOI 10.34583/ichthy.63.0_4

Yuka Matsumura, Jun Ohtomi and Hiroyuki Motomura. 2026. New record of *Astronesthes ijimai* (Stomiidae) from Kagoshima Bay, Kagoshima Prefecture, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 63: 4–6.

Abstract

A single specimen (131.9 mm standard length) of *Astronesthes ijimai* Tanaka, 1908 (Stomiidae) was collected at a depth of 226.5 m from Kagoshima Bay, Kagoshima Prefecture, Japan. In Japanese waters, *A. ijimai* has previously been recorded from Ibaraki Prefecture, Sagami, Suruga and Tosa bays, Enshu-nada, Kumano-nada, Kuro-shima island (Osumi Islands), the East China Sea, and the Okinawa Trough. Thus, the presently reported specimen, described herein in detail, represents the first record of *A. ijimai* from Kagoshima Bay as well as Kyushu.

ワニトカゲギス科トカゲハダカ亜科トカゲハダカ属魚類（Stomiidae: Astronesthinae: *Astronesthes* Richardson, 1845）は、三大洋の熱帯から温帯域に広く分布する（Parin and Borodulina, 1994；木村ほか, 2022）。本属には現在は 49 有効種が認められており（Liao et al., 2006; Nakayama et al., 2021）、日本には 14 種が分布している（木村ほか, 2022）。本属魚類は臀鰭軟条数が 11–22 であり、その基底は短いこと、主上顎骨歯が櫛状に密集し後方に傾斜すること、および腹鰭前腹側発光器が等間隔に並ぶことなどによって特徴づけられる（Liao et al., 2006；藍澤・土居内, 2013）。

トカゲハダカ *Astronesthes ijimai* Tanaka, 1908 は、体側発光器数が 37–42 であること、腹部体側発光器の後方 2 もしくは 3 個が前方の発光器よりやや高位であること、尾柄下部に黒色帯があること、および尾柄長が尾柄高の

1.2–1.8 倍であることなどによって同属他種と識別される（Tanaka, 1908; Parin and Borodulina, 1994；藍澤・土居内, 2013）。Sokolovskiy and Sokolovskaya (1981) は本種を *Astronesthes lucifer* Gilbert, 1905 の新参異名としたが、Parin and Borodulina (1994) は形態学的手法に基づく本種の分類学的再検討を行い、*A. ijimai* を有効な種として認めた。本種は国内からはこれまでに茨城県から高知県にかけての太平洋岸沖、大隅諸島黒島沖、東シナ海、および沖縄県那覇市から記録されている（工藤ほか, 1969；北島ほか, 1976；藍澤・土居内, 2013；三澤ほか, 2020; Teramura et al., 2022；本田ほか, 2024）。

2025 年 3 月に鹿児島湾から 1 個体のトカゲハダカが漁獲された。本標本は九州沿岸における標本に基づく初めての記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

標本の計数・計測方法は Hubbs and Lagler (1958) と Goodyear and Gibbs (1970) にしたがった。発光器の定義と略号は Morrow (1964) と Goodyear and Gibbs (1970) にしたがった。発光器の日本語名称は藍澤・土居内 (2013) にしたがった。標準体長（standard length）は体長または SL と表記した。体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行い、計測値は体長に対する百分率で示した。生鮮時の色彩の記載は、固定前に撮影された標本（KAUM-I. 215234）のカラー写真（Fig. 1）に基づく。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館（KAUM）に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。

Astronesthes ijimai Tanaka, 1908

トカゲハダカ

(Fig. 1)

標本 KAUM-I. 215234, 体長 131.9 mm, 鹿児島県垂



Fig. 1. Fresh specimen of *Astronesthes ijimai* (KAUM-I. 215234, 131.9 mm SL, A: lateral view; B: ventral view) from Kagoshima Bay, Kagoshima Prefecture, Japan.

水市垂水漁港の 6.1 km 南西沖 鹿児島湾 (31°26'57"N, 130°38'22"E), 水深 226.5 m, 簡易型トロールネット (ニチモウ LC-IV 型), 2025 年 3 月 11 日, 大富 潤 (南星丸).

記載 記載標本の計数値は以下のとおり: 背鰭 11 軟条; 臀鰭 18 軟条; 胸鰭 6 軟条; 腹鰭 7 軟条; 胸鰭前発光器 (IP) 数 11; 腹鰭前腹部発光器 (PV) 数 19; 腹部腹側発光器 (VAV) 数 20; 尾部発光器 (AC) 数 14; 腹側発光器 (IC) 数 64; 腹鰭前体側発光器 (OV) 数 19; 腹部体側発光器 (VAL) 数 21; 体側発光器 (OA) 数 40; 前上顎骨歯数 6; 上顎歯数 12; 下顎歯数 16; 口蓋骨歯数 7; 鰓耙数 3+12 (上枝 + 下枝). 各部の体長に対する割合 (%) は下記のとおり: 体高 15.1; 尾柄高 7.8; 体幅 8.5; 尾柄長 12.9; 頭長 19.7; 吻長 4.2; 眼径 4.8; 両眼間隔幅 5.3; 後眼窩発光器長 1.9; 上顎長 14.8; 背鰭前長 50.3; 背鰭基底長 11.8; 臀鰭前長 75.8; 臀鰭基底長 14.4; 胸鰭前長 17.5; 胸鰭長 11.5; 腹鰭前長 46.9; 腹鰭長 13.8; ひげ長 28.3; 第 1 上顎歯長 2.5; 第 2 上顎歯長 3.7; 下顎第 2 歯長 4.1.

体は細長く, 側扁する. 体高は頭部直後から背鰭起部までほぼ同じで, 背鰭起部から尾鰭基部にかけて次第に細くなる. 頭部は小さく, 吻は短い. 鼻孔は 2 対で眼の前上方に位置し, 前鼻孔は円形, 後鼻孔は勾玉形で前鼻孔よりやや小さい. 眼は口裂の中央よりわずかに前方に位置する. 口は端位で大きい. 前上顎骨歯は犬歯状で 1 列に並ぶ. 前上顎骨歯の前方側 4 本は長大で第 2 歯が最長となり, 後方側の 2 本は比較的短い. 主上顎骨歯は櫛状で密に並ぶ. 下顎歯は犬歯状で 1 列に並び, 第 2 歯が最長. 口蓋骨には細い円錐歯が 1 列に並ぶ. 下顎に 1 本のひげがあり, 後方に伸ばしたときその先端は, 8 番目の腹鰭前腹部発光器 (PV) に達する. ひげの末端にある球状体は細長い楕円形で付属

枝はない. 第 1 鰓弓の鰓耙は 2 本の小棘からなる. 眼後発光器は大きく, 眼窩長の 40.6%. 前背縁が凹んだ丸形で眼窩後縁下方に位置し, 厚い皮膚によって眼窩と隔てられる. 腹鰭基部は背鰭起部より前方に位置し重ならない. 臀鰭起部は背鰭基底よりかなり後方に位置する. 背鰭基底は臀鰭基底よりわずかに短い. 胸鰭は短く, 8 番目の OV に達しない. 尾柄は太く, 尾柄長は尾柄高の 1.6 倍. 背部と腹部に脂鰭をもち, それぞれ臀鰭第 6–8 軟条直上と 15, 16 番目の VAL 直下に位置する. 鰓蓋に発光器をもたない. IP, PV は連続し, それぞれ等間隔に並ぶ. PV の最後部 3 個の発光器は上方に湾曲して並び, VAV と連続しない. VAV は AC と連続し, それぞれ等間隔に並ぶ. AC のうち, 臀鰭基部後端上方に位置する 2 個は, 他の発光器より 2 個分上方に位置する. OV と VAL は連続し, 等間隔に並ぶ. VAL の最後部 3 個の発光器は, 他の VAL よりわずかに上方に位置する.

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) — 体背部は黒褐色で, 頭部と体側面は銀色の光沢がある. ひげの基部は白色で, 先端にかけて黒色を帯びる. 眼後発光器の中心は白色で, 黒色の皮膚に囲われる. 体側の発光器は紫色. 背部脂鰭と腹部脂鰭は黒褐色で, その他の鰭は基部が黒褐色. 口腔内と尾柄腹側は黒色.

分布 本種は西インド洋, 日本, 台湾, 東シナ海, インドネシア近海, およびオーストラリアからの記録があり (Parin and Borodulina, 1994; 藍澤・土居内, 2013; Koeda, 2019), 国内では, 茨城県沖, 相模湾, 駿河湾, 遠州灘, 熊野灘, 土佐湾, 大隅諸島黒島沖, 東シナ海, および沖縄県沖から記録されている (工藤ほか, 1969; 北島ほか, 1976; 藍澤・土居内, 2013; 三澤ほか, 2020; Teramura et

al., 2022; 本田ほか, 2024). 本研究により新たに鹿児島湾からも記録された。

備考 記載標本は、臀鰭軟条数が18であること、胸鰭軟条数が6であること、PVが等間隔に並ぶこと、体側発光器 (OA = OV + VAL) が40であること、VALの後方の3個がわずかに高位に位置すること、尾柄腹部に黒色部があること、および尾柄長が尾柄高の1.6倍であることなどの特徴が、Tanaka (1908), Parin and Borodulina (1994), および藍澤・土居内 (2013) の示す *Astronesthes ijimai* の特徴と一致したため、本種に同定された。ACの計数値(14)は既知の計数値(11–13)と相違がみられたが、同程度の差は同属他種でも確認されているため [例えば, *Astronesthes martensii*: 10–13 (Parin and Borodulina, 1994)], 種内変異の範疇と判断した。また、尾柄部体側面の黒色帯は確認できなかったが、腹側に黒色部が確認できたため、黒色素胞が剥がれ落ちたものと判断した。

トカゲハダカの国内における分布記録は「分布」の項で述べた通りである。鹿児島県内における本種の記録として、北島ほか (1976) により大隅諸島黒島沖の水深425 mから採集された本種2個体の報告があるものの、標本は残されておらず、北島ほか (1976) にも同定を確認するための形態情報や写真などは示されていない。そのため、記載標本は鹿児島湾ならびに九州からのトカゲハダカの初めての記録となるとともに、現存する標本としては鹿児島県で唯一のものとなる。本種は水深25–620 m (国内は水深200–500 m) から記録されており (Parin and Borodulina, 1994; Teramura et al., 2022), 鹿児島湾産の標本も水深226.5 mから漁獲された。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり、鹿児島大学水産学部附属練習船南星丸の乗組員と鹿児島大学水産学部の水野有朝氏には標本の採集にご協力いただいた。鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアのみなさまには標本の作製および登録作業においてご協力いただいた。原稿の執筆にあたり、鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室特任助教の松本達也氏には適切な助言をいただいた。Ichthy担当編集委員の中村潤平氏と匿名の査読者には原稿に対して適切なご指摘をいただいた。以上の方々に謹んで感謝の意を表す。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・22K02161・23K20304・24K02087・25K05776)、JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSC CB20200009)、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補

地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- 藍澤正宏・土居内 龍. 2013. ワニトカゲギス目, pp. 368, 387–392, 1835, 1839–1841. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Goodyear, R. H. and R. H. Gibbs, Jr. 1970. Systematics and zoogeography of stomiatoid fishes of the *Astronesthes cyaneus* species group (family Astronesthidae), with descriptions of three new species. Archiv für Fischereiwissenschaft, 20: 107–131.
- 本田康介・瀬能 宏・和田英敏. 2024. 相模湾産魚類目録 (改訂). 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 53: 127–218.
- Hubbs, C. L. and K. F. Lagler. 1958. Fishes of the Great Lakes region. Bulletin of Cranbrook Institute of Science, 26: 1–213, pls. 1–44.
- 木村克也・津田裕一・中山直英. 2022. 小笠原諸島近海から採集された日本初記録のトカゲハダカ属魚類 *Astronesthes gemmifer* スミツキトカゲハダカ (新称). 魚類学雑誌, doi: 10.11369/jji.22-019 (14 Nov. 2022), 70: 65–71 (25 Apr. 2023).
- 北島忠弘・田川 勝・岸田周三. 1976. 九州南西海域の大陸斜面及び沖縄舟状海盆におけるトロール調査結果について. 西海区水産研究所研究報告, 48: 47–92.
- Koeda, K. 2019. Family Stomiidae, subfamily Astronesthinae, pp. 254–260. In Koeda, K. and H.-C. Ho (eds.) Fishes of southern Taiwan. Vol. 1. National Museum of Marine Biology & Aquarium, Pingtung, Taiwan.
- 工藤晋二・通山正弘・岡村 牧・森田正一. 1969. 土佐湾陸棚崖産の底魚類の食性の研究. 南西海区水産研究所研究報告, 2: 85–103.
- Liao, Y.-C., L.-S. Chen and K.-T. Shao. 2006. Review of the astronesthid fishes (Stomiiformes: Stomiidae: Astronesthinae) from Taiwan with a description of one new species. Zoological Studies, 45: 517–528.
- 三澤 遼・木村克也・水町海斗・服部 努・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・永尾次郎・柴田泰宙・遠藤広光・田城文人・甲斐嘉晃. 2020. 東北地方における着底トロールで採集された魚類の分布に関する新知見. 魚類学雑誌, doi: 10.11369/jji.20-023 (2 Oct. 2020), 67: 265–286 (5 Nov. 2020).
- Morrow, J. E., Jr. 1964. Family Chauliodontidae, pp. 274–289. In Bigelow, H. B., C. M. Breder, Y. H. Olsen, D. M. Cohen, W. C. Schroeder, G. W. Mead, L. P. Schultz, D. Merriman and J. Tee-Van (eds.) Fishes of the western North Atlantic. Part 4. Memoirs Sears Foundation for Marine Research, No. 1. Yale University, New Haven.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Nakayama, N., S. Ohashi and F. Tanaka. 2021. A new species of *Astronesthes* (Actinopterygii, Stomiidae, Astronesthinae) snaggletooth from the tropical western Pacific, with comments on the occurrence of *Astronesthes luetkeni* Regan and Trewavas in Japanese waters. Ichthyological Research, doi: 10.1007/s10228-021-00813-6 (19 Apr. 2021), 69: 82–89 (Jan. 2022).
- Parin N. V. and O. D. Borodulina. 1994. A preliminary review of the *Astronesthes chrysophekadion* species complex assigned to the subgenus *Stomianodon* Bleeker, with description of a new species. Voprosy Ikhtologii, 34: 457–468.
- Sokolovskiy, A. S. and T. G. Sokolovskaya. 1981. Species composition of the family Astronesthidae (Salmoniformes) in the North West Pacific. Journal of Ichthyology, 21: 43–48.
- Tanaka, S. 1908. Notes on some rare fishes of Japan, with descriptions of two new genera and six new species. Journal of the College of Science, Imperial University, Tokyo, 23: 1–24.
- Teramura, A., H. Kohno, H. Senou, K. Kikuchi, S. Hirase and T. Kunishima. 2022. A preliminary deep-sea fish fauna list with new and northernmost records, in the continental shelf to the upper continental slope in the east Enshu-nada Sea, central Japan. Plankton and Benthos Research, 17: 95–99.